

二〇一七年九月二九日(能勢山路参加者一七名)

畑一面ダイヤびかりす露葎	なおこ
曼珠沙華道ゆくみなに愛でられて	なおこ
露草が綺羅と朝日をはじきをり	なおこ
水霜はまるでお菓子のコーティング	なおこ
枯蠟螂元気だせよと存問す	なおこ
野路をゆく一步が至福草紅葉	せいじ
野路そぞろ川面に映る秋日傘	せいじ
うち仰ぐ椎の神木天高し	せいじ
真青なる空うつしたる芋の露	せいじ
段畑に銀撒き散らす猫じゃらし	小袖
朝日燦畦の下草露滂沱	小袖
斯く装ふ花野やここも寺領てふ	小袖
神さぶや産土の森秋灯す	小袖
秋晴やシルバーハイカー足軽し	満天
枯蠟螂虜としたる吟行子	満天
草紅葉自由奔放築地塀	満天
妙見山の天辺ほのと粧ひぬ	満天
野辺ゆけば亡き母恋し彼岸花	みどり
一末社実りの秋の笙の笛	みどり
毬栗のはぜて笑ひし枝の先	みどり
境内の樹間を縫ひし秋日影	みどり

せせらぎと虫の音が和す能勢山路	はく子
畔川のほとり埋めて蜚草	はく子
鎮守社へ紆余の坂道柿熟る	はく子
供華用といふ寺畑の花野かな	うつき
秋晴や杭に長靴逆さ干し	うつき
豊の秋扇重ねに棚田かな	菜々
能勢旧家戸ごとに小橋水の秋	菜々
堰落つる水音も里の秋の声	有香
相寄りておしゃべりしては花野ゆく	有香
秋澄める能勢路や四方の山襖	わかば
秋晴の嶺々に一朵の雲見えず	わかば
振りあげし鎌力なし枯蠟螂	よう子
高稲架に傾く谷戸の夕日かな	ともえ

二〇一七年九月二九日(能勢山路参加者一七名)

吟行句会みのる選